新著紹介

道德の根本義

文學士　吉田靜致著

學界の恩人故加藤弘之博士我國學問の獨立及普及を計らんが爲に「老後最終報國」の決心を持つて設立を宣言せられたる大日本學術協會は、不幸にして故男爵の兼て覺悟せられしが如く、此世への置土産とはなりしが協會設立以來二年有半を閲し、協會の手に刊行せられしもの既に八種に及び、而して本書はその最新刊である。廣く文化科學の全般に亘りて「學者研究の精華」を集め、「精神的獨立を圖らん」ことをば會の目的とせらるゝものにて「國家體面の上より見るも　子弟教育の上より見るも」寔に慶賀の外はない。

本書題して「道德の根本義」と爲し、別名をば「同圓異中心主義」と呼んで居られる。猶、之に附錄として「宗教と道德」及「自覺の徹底」の二論文が掲載せられてゐる。

「人格の人格たる所以の本質は精神生活であつて、其精神生活の特異性は同圓異中心的であり、又隨つて人格は同心一體的のものであり、延いて又、國家と國民とは精神的に見る限りに於ては一致合體して居るものであるとか、又「斯かる特異性を有する精神生活は之を他の方面より見て特殊即普遍的なるものといふべく可能的無限なりといふべきものなること」等を闡明せんとすることが本書の目的であるとか、「同心一體的生活を遺憾なく發揮し人格の人格たる所以の本質を顯現するに最も善く適する具體的なる境遇は、實に家といふ生活であり、又家の最も自然に最も順當に發展して成立するに至りしが如き種類の國家の生活である……此點より見て、尊嚴なる國體を有する我帝國の如きは精神生活の實現につきての理想的境遇たることを信ぜざるを得ない」といふが如き論結は本書說く所の道德の根本義より當然生じ來るとせられてゐる。誤れる個人主義が喧傳せられたり、民主主義的暗流を氣遣はしむるが如き現代に於いて斯かる結論が、確實なる主義より自然に生じ來るならば、吾人は衷心より之を悅ばざるを得ない。本論に入つてよりも人格と國家とは精神的に見る限り一致合體してゐる旨は隨所に述べて居られるが、此兩者の關係を更に明確に論じて貰ひ度い、或は人格の發揮には他の社會の形體ではなくて、國家といふ境遇が好都合であるとか、或は我國家はそれには最も理想的である樣に言つて居られるが、何故に人格の發揮に國家を單位に取ることが便利であるか、又、人格の人格たる所以の本質を發揮するに最も善く適する具體的なる境遇は實に家といふ生活であるとは、唯、序文に述べられて居るばかりで本論には一向說明が無い樣である、併して國家とは家の最も自然に最も順當に發展して成立するに至りしが如き種類と言はれて居るのであるから、是非とも家に關する說明が詳細になくてはならない。著者の所謂同圓異中心主義といふ、この異鄕的なる名命並にその思想に關しては以下多少紹介するの要があると思ふ。

「世の中の事物の組織若しくは構成」を分類すると三種類となる。普通に知られてゐる機械的及有機的なる二種類は、「人間にの

み存する精神生活には當嵌らない。之は實に同心一體的、或は同圓異中心的なることをその特異性と爲してゐる。この精神生活の原理に就ては、歐米にて、或は共働を說き、或は協同連帶を敎へ、乃至ロイスの忠誠の原理と云ひ。ヒーボディーの理想主義の原理と言ふも、之等皆精神生活の本質を充分に顯現せず。精神生活は「其の內容實質に於ては一致(可能的)にして居る、」即ち同心一體的である、中心點の方より見れば、夫々區別が立てられるけれども、その實質は「共通の同一の無限大の圓その者であるが如き」性質のものであるとせられてゐる。個人的なる主觀(個人的唯心論、或は人本主義を認めらるゝは同氏著「倫理學要義」に明白である)の立場、人格の本質を發揮するの如何といふ點より見れば人格相互は相異つて居る、この意味で「異中心」であり、斯く異中心なるにも拘はらず內容實質は可能的には一致合體して居るとの意味で同圓と唱へられるらしい、普通に圓といひ、中心といふ場合には幾何學的の圓又は中心をば思ひ浮べるが、斯かる圖式は玆には適應されない樣に思ふ。幾何學的に嚴密なる圓ならば圓のみ同じで中心を異にし得ないことは明白である。附錄「自覺の徹底」中に、個體の可能性を皆完全に發揮し得たならば同じく絕對となるべきも、現實に於ては同一絕對の域に達し居らずして、發揮の度如何に應じて同心圓を何個か畫かれてゐる。即ち現實の狀態では同圓でもなく異中心でもない樣に理解せられる。可能的なる人格として見る場合には附錄に示さるゝ同心圓は當嵌らず異中心である、然も同時に同圓で無くてはならぬと言はるれば、その時の「圓」とは、人格活動の「範圍」乃至「境遇」とでも解釋するより外に途はない。圖型を彷彿せしめることは理解に便利な樣で、事實は之に相反してゐる。

個人的唯心論の立場に立つて居るからして最も確實なる者は、主觀である、自己の人格である。この主觀を基として類推法によりて他人の人格を認める、玆に己の人格と他人の人格とは同一物ではない、相異つてゐる、されど排他といふことゝは正反對である、「同中の異である。隨つて相異なれる人格の集りて成せる國家は全然排他的のものではない。可能的には國己と家とは一心同體である。故に歐米に行はるゝが如き個人主義や、その正反對なる、個人の人格を認めざる誤れる「全體主義」は取るに足りない、我國民は夙に國民と國家とをば別物とは考へてゐない。故に尊嚴なる國體を有せる我國民は歐米人の如く、極端なる個人主義より逆に極端なる「全體主義」へと走る要がない、身を投じて國家の爲に盡すは聽て自己の人格を完全に發揮する所以であると述べて居られる。

以上の國民と國家とは精神的に見る限り排他的のものに非ずして、一致合體するものなりとの說に理論的根據を附與せんが爲に――著者は定めし斯く言ふことを嫌ひ、彼の哲學上の主義より當然の歸結であると叫ばれるであろうが――哲學上の論說を批評しつゝ自說を開陳せられてゐる。一元論では實在は一であり、此世界は永久不變の完全無缺なる統一體であり、隨つて自由の活動と云ふ如きものを容れる餘地が無い、進步發達は云爲せられない、人格の本質を完全に發揮した絕對の境界に在つては善とか惡とかを云々するを要しない、否斯かることを論じても詮方な

い。然らば多元論如何と言ふに、一元論に於けるが如き統一なく雜多である、不統一である、隨つて變化はある、但しその變化は進歩であるか否かは保證の限りでない、唯、不斷の變化である、終局に於ける至善の勝利等を說くはゼームス等實用論者の希望に留る。

一元論にも非ず、多元論でも滿足出來ずとなれば茲に多即一主義、換言すれば、同圓異中心主義を認めざるを得ない、吾々は個體的な存在物としては有限的である、有限的にして尙も其中に無限を包藏してゐる、即ち、吾々は無限有限的存在物である。又吾々が人格を發揮し得んが爲には特殊なる、具體的なる相を籌らなければならぬ、乍然特殊は普遍を前提とせずには考へられない、特殊からは超絕的に普遍ありとは考へられない、特殊個體的と見るも既に其內に絕對普遍性を具へる、斯くて吾々は特殊個體的卽絕對的なものである。各個體はそれ〴〵其中に絕對普遍性を包藏した同じ宇宙である。宇宙と云ふ大なる圓の中心點として光を放つ者が意識であり、普遍絕對そのものを具體的に發揮した焦點とも云ふべきものが自覺せる人格者である。普遍絕對といふが實質に於いては自他彼此の間には何等の相違は無いのであるが、唯、中心點若くは焦點といふ方から見て區別を立てる迄である、大悟徹底した人と然らざる人との差異は絕對普遍なるものを明かに發揮したと否とに差違はあるも實質は全く共通であり、同心一體的である、否、同圓異中心的であると云ふて居られる。卽ち絕對普遍性の發揮に程度の差異ありと一方で言ひ、他方では各人の絕對普遍性は發揮の度の如何に拘はらず同一であると論じて居られる樣で、その性質を發揮すると否とは、一見したる處では、その本質には何等の變化を齎らさず、人格を發揮せんとの努力の意義を疑はしめる。兎に角、說明が少しく不徹底で、甚だ理解に困難である。特殊個體と言ひ、普遍絕對といふ處、二元的に聞える處が少くはないが(一元論及多元論の事は論駁せられて居るが、二元論のことは言つて居られない。之は多元論を擧げればそれで盡きてゐると云ふ考からかも知れないが)カントの現象界と靈智界との如き絕對的に孤立したものにあらざる旨を明言し、特殊個體に卽して普遍絕對あり、普遍絕對に卽して特殊個體有りと論じ、從來の靜的一元論に對し動的一元論とも呼ぶべきであると爲し、クロオチエ並にヴアリスコの說は自說に近しとして兩者の說をば參考に供せられてゐる。

然らば國家と同心一體たるべき國民各自が何故に排他的に互に相離在して居るかの如く感ずるかと言ふに、これには二つの理由がある、一は中心點と呼ぶ主觀的感情の係はる方面に因はれること、一は共通な普遍的內容を十分に會得するに到らぬが爲に、非反省的な人は多く各自の特殊的方面を見て直ちに排他的なりとの謬見を懷くに到るのである。昨の我と今の我とは全く同一物ではない、然も何人もそが同心一體であることを疑はない、然らば我と多少相異なれる他の人とが同樣に同心一體的なりとは何故に觀ぜられないか、然も昨の我と今の我との相違に比して、我と他の人との相違がより僅少なる場合抄からざるに非ずや、此洞察の缺如によりて誤謬生ずと爲してゐる。此場合にも先の唯心論の立場より他の人を類推で認めたるが如く、過去の我と現在の我との關

係を類推によりて他人と我との關係にも適應せんとするものである。吾々は類推によりて、我と等しきものゝ存在を許す、されど之を以つて、我と同じ、又は、我と一心同體なりと容易く見做すか、余も亦謬見を懷ける一人なるか。

附錄の一つ「宗教と道德」では兩者の關係を述べて、道德は宗教化するを要し、宗教は道德化するを主要すと爲し、眞の宗教と、眞の道德とは畢竟一である、何等の差別が存しないと說き、「自覺の徹底」では自覺の起る場合を擧げ、徹底したる自覺を絕叫して居られる。

全卷を通じて述べられて居る處國家と倫理、殊に我國體と道德とに關し闡明せらるゝ處決して尠少で無いことは疑はない。されど本論並に「宗教と道德」とに縷々辯論せらるゝ多卽一主義、否、同圓異中心主義は諸物を打して渾然たる一體とせらるゝ處甚だ妙を極めてゐる、乍然渾一主義は動もすれば、渾沌主義に陷ることなきかを恐る。本論三百有十三頁嚴密なる章節の別なく、本文中の主要なる字句を摘出して目次とせらるゝ爲、連り込まれて漫然たる愚稿を草するに到れるも以上所々に披瀝したる質疑を散ずるの機を與へらるれば幸なり。（發行所、東京市小石川區竹早町三十七大日本學術協會、定價金貳圓）（尾生光三郎）

印度の佛教

荻原雲來著

佛教は印度の宗教思想が發達變化せる中の一階段であるから、その思想が本體論、宇宙論、心理、倫理、又來世論等に於て、從前の思想と密接の連絡があり、從つて佛教思想の起原と變遷とを明にせんとせば、その從つて來る所を知らなければならぬ、佛教に於ける厭世觀、出家修道、輪廻と解脫、業感緣起、根本無明、智明、捨離と觀行、これ等決して佛陀の創說ではなくて、數論、ジャイナ教等と等しくその源は皆之を優波尼妙土のアートマン說に由來するのである、然れども當時佛教以前の諸學派に於ては、徒らに身を窘しめ、精を凝して苦行し、以て生天解脫を希望し、或は又口に深奧の哲理を談ずるも身に解脫の因を修せざるものあり、茲にこれ等無義の苦行を廢し、空論を斥ぞけ、誠實に眞解脫の道を求めんとする氣運が一般社會に勃興して來た、この氣運に乘じ、種姓の如何を論ぜず、貧富の懸隔を問はず、平等に淸新なる道德的宗教を弘布したものは卽ち釋尊であつた。その釋尊の宗教が第十二世紀回々教の壓迫を受けて衰滅せんとする期に至るまで、諸他の學派と交涉關係し、大小顯密自他兩力の教理並び起り、年所を經るに從つて漸次發達變化し、それ等學說興亡の時代の如き相互錯雜の爲に今日より推して之を知る事が出來ないのである。併し著者は便宜のためその重なる點に就て、(一)根本佛教發達時代——佛入滅より龍樹の初めまで、(二)大乘教隆興時代——龍樹より第二の法稱まで、(三)佛教衰頹時代——第二の法稱より犀那王朝の終りまで、の三期に區分して研究して居らるゝのである、けれども本書に於ては第一、第二の兩時代の研究に止まり、第三期は紙數の制限が許さなかつた爲めではあらうが、「其間の年代の長きに比して記すべきこと多からず、大抵密教特に呪術教弘傳の事蹟のみ」として略されたことは遺憾に思はざるでもない。（以上總說に就て）。